

思い出を語る



幾多の戦争体験後、終戦は船橋で迎えました。

成田に農地を買い、一心に畑仕事に打ち込みました。

戦争で長男を夫った悲しみを忘れようとしていたのかも知れません。「戦争の恐ろしさが忘れられない」そう話す伊藤さんの脳裏には、さまざまな情景が去来していたことでしょう。

その後空港用地となったため公園に売りましたが、30才で家を出てから70才で戻るまで、40年間家を離れていました。

町内には90才以上の方が47人います。

その中から2人、元気な様子を拝見し、思い出話を語っていただきました。

70才から徴収員

地元に戻ってからは仲間の誘いもあり

身にしみる戦争体験 伊藤 竹太郎さん (南川岸 90才)

集金したことも、簿付けの苦勞が目にも見えるよ

老人クラブに入りまして、それがまた忙しい毎日。会の運営費にあてるため町税・国民年金・土地改良費等の徴収をはじめました。

今の楽しみは何といってもゲートボール。午後1時には近くの練習場にいそいそと。みんなの元気な姿を確かめあうふれ合いの場なんでしょう。つい先頃、お孫さんの結婚式に出席するため九州まで出かけました。そして、1週間の観光旅行も楽しみました。12月にも、もうひとつお孫さんの結婚式が控えているとか。



苦勞を物語る記録簿

うです。奥さんに亡くなられたのを機に、14年間続けた年金などの徴収を次に譲りました。

日課の半分はゲートボール

母の生家である茨城県で生まれ、9歳の時横芝に。当時のことで13才から働き始めましたが、農業の手伝いをした後25才頃から20年間、揚操網漁の機械の運転をしました。「昔はいわしが沢山捕れたなあ」と、とてもなつかしそうに話されました。

自慢は米づくり表彰

菅野 寅次郎さん (南川岸 90才)



牛による水田耕起、今はもうなつかしい

不漁になってからは農業に切り換え、昨年90才まで続けました。昔は牛を使つての水田耕起。苦勞の多い中で、自慢のひとつは「米を採るのが上手」というので、敬老会の席上、町から表彰されたことです。その際、取材にきて写

した作業中の写真が、大切にアルバムに貼ってありました。腰が少し曲がりましたが、肌の色艶はともよく、ほんのり赤く染まった頬にとっても魅力を感じます。その源となっているのは、60年間飲み続けている養命酒のお陰かも？

今是一人で隠居住まいをしておられますが、近くには、大勢の子どもたちがいて、かわるがわる見回りに来ているそうです。悠々自適の生活を楽しんでいるようです。